

図書紹介

井上和夫 陸自75 著

写真集『魂 忠魂碑』

—道内戦没者の慰霊—

大内 廣 陸自71

本書は、元陸上自衛官の井上和夫氏が、戦死者を慰霊する北海道民の営みのうち、忠魂碑等と名の付くものほぼ全てを訪れ写真集として自費出版したものだ。

巻頭に元陸上幕僚長で前偕行社理事長でもあった富澤暉氏の寄稿があり、その名文が本書の意義を高めている。北海道の主要な4紙に紹介され、著者本人から道内の駐分屯地に寄贈もされた。『偕行』においても昨年11月号にその業績が紹介されている。改めてここで紹介するまでもないのかもしれないが、陸上自衛官OBにこのような人物のいること知って欲しいのと「英霊に敬意を」の『偕行』の理念に合致するとの思いから図書紹介として投稿した。

私が特に惹かれ感激を覚えたのは新聞記事にある著者の次の言葉だ。

「これまで自衛官の戦死は皆無だが、万一戦死者が出た場合どのような名誉を称え、慰霊をするのか？この疑問を考えるために過去に学びたい、これが道内を巡るきっかけと

なった」というのだ。

多くの国民にとって自衛官の戦死の問題はあまりにも唐突だろう。戦死と言われても、戦争は放棄しているし国軍もない。今の自衛隊に深く関係する問題でもない。平和な時代に縁起でもない、その時に考えれば済むことだ。遺族の経済的補償が万全ならそれで十分ではないか。市ヶ谷には「殉職自衛官の碑」もあるし問題ない。著者は、問題を先送りしているような現状に疑問を投げかけている。日本の平和ボケという病は我々にとっても他人ごとではないと私も思う。

次に驚くのは調査数が522という数だ。4年半を費やしたそうだが定年後の趣味の範囲を大きく超えていて使命感のようなものすら感じる。私の個人的にゆかりのある片田舎の鶴居村を見てみた。なんと忠魂の碑が3基もあったのだ。祀るということの意義を深く考えさせられる。また歴史研究の第一歩と言われる現物資料、522件を集大成したともいえる。郷土史、家族史などの研究にも重要な資料となるだろう。観光資源ともなるだろう。

元自衛官としてのみならず日本国民の一人としてこの業績に感謝し賞賛したい。もう少し若かったら私もカメラを携えて、などと思わぬでもない。

(価格は2500円。希望者は井上氏 prunedog@beigeplala.or.jp まじ)